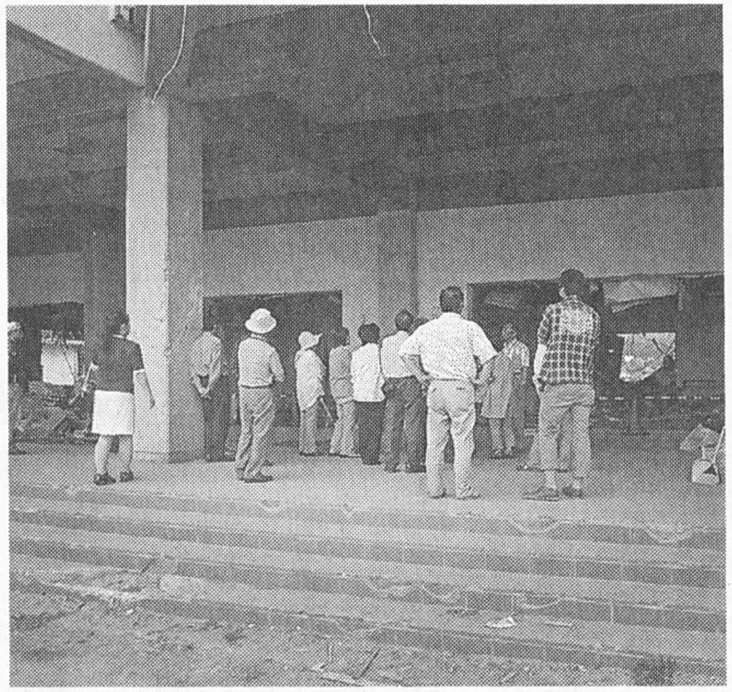
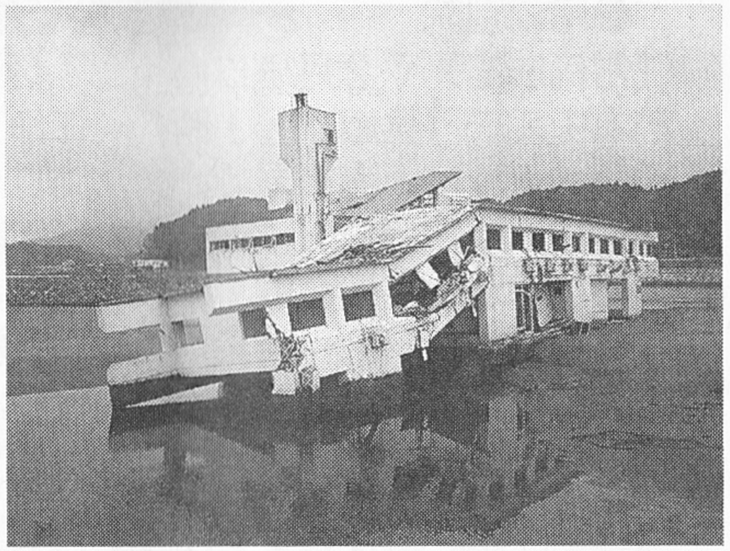
震災遺構

津波の被害を受けた、たくさんの建物のなかで、「震災遺構」として残すことが検討されている建物がある。「震災遺構」として残すことで、津波の凄(すさ)まじさ、恐ろしさを後世に伝え、教訓を残すためだという。

現在、その場所では、ツアーガイドの説明を聞きながら、震災被害の大きさに息をのむツアー客の姿を見





ることができる。他府県からバスで来られる人もあり、いわば観光スポットのようにもなっている。

その日も、20人ほどのツアー客が、観光バスで乗りつけていた。それぞれに、津波の爪痕が残る建物を見上げながら、ツアーガイドの説明に耳を傾けていた。そんな折、ツアー客の群れから少し離れたところに、小さな花束を手にしたまま、所在なさげにうつむいている人がおられた。ご遺族であろうか。持ってきた花束を手向けようにも、ツアー客に阻(はば)まれて、彼らが立ち去るのを待っているのだ。

「震災遺構」を通して、津波の凄まじさ、恐ろしさを、たくさんの方に伝えること、教訓を残すことは、もちろん大切なことである。

同時に、その後ろで、同じく「震災遺構」を通して、亡くなったご親族や友人知人に想いを寄せておられる人、悲しみを抱えておられる人の姿にも、目を向けたいと思った。

（安部智海）